

緊急寄稿

『ドライ・ニードリング(Dry Needling;以下DN)問題』

山本 崇

医道の日本3月号の記事にDNに触れた記事があった。(2016年)

これが実は政治的な大問題としてここアメリカでは存在している。

「へえー、ドライニードリングね。」などと感心している問題ではないことを本稿で問題提議しておきたい。実はこれは世界的に重大な問題をはらんでいると考えているからだ。それぞれの国情によって各国でのその対応は別れるだろうが、鍼灸業界の人はぜひ注目しておいていただきたい問題なのである。

DNとは何か？

まずこの問いに触れておこうと思う。そこがそもそも問題の発端であると考えられるからだ。実際に細かく仔細を調べて書くと長くなるので、要点をまとめて説明していくが、我々日本人が理解しようとすると言葉の問題もあるような気がするので、先にその点を述べる。

ちなみに今我々が行っている鍼灸と対比して英語で書くと

「Acupuncture vs Dry Needling」で、もしも日本語で書くと

「鍼治療 対 ドライニードリング」となる。

今こうやって日本語で書いた字面をみると大して違いがわからない気がするが、それこそが問題の本質なのかもしれない。日本人得意のカタカタ横文字で鍼治療をカッコよくした、みたいな風である。

要点はつまり「Acupuncture = Dry Needling」なのか？

それとも「Acupuncture ≠ Dry Needling」なのかがすべてと言っていいだろう。日本語で書くと鍼治療は「鍼による治療」にすぎず、「ドライニードリング」は「鍼による治療」でイコールだろう。乾燥鍼療法では意味不明だからだ。また1800年代に「干針」という鍼灸技法が中国にあったという。(http://aim.bmj.com/content/early/2015/12/15/acupmed-2015-011010.long)

DNの歴史とその特徴

初めてこの単語(DN)が登場したのはアメリカ人医師ジャネット・トラベル(Dr. Janet Travell)の論文('Myofascial Pain and Dysfunction: Trigger Point Manual')である。この論文ではトリガーポイントを論じていて、そこに注射器で痛み止めを注射する方法と、ただ鍼を刺しただけの効果の違いを述べる上でこの単語、ドライニードリングが登場する。彼女はまたトリガーポイントというものを西洋文化圏で初めて提示した人物の一人でもある。こちらはデビット・サイモン医師との共同研究からのもので、いずれも1940年代のことである。

その後20世紀を通して色々なDN関連論文が幾つもでてきているようである。DNは独自のもので鍼灸とは関係ないと言っている勢力が注目するルーツ的な人物と研究が幾つもある。カレル・ルウィット医師(Dr.Karel Lewit)、チャン・グン医師(Dr. C.Chun Gunn)、また近年ではドン医師 (Dr.H.C.Dung)やマ医師(Dr. Yun-Tao Ma)が知られ、彼らの研究論文や文献がそれだ。これらの人たちがまたそれぞれに違ったアプローチや違った技法を始めたから、それぞれの人物や研究を説明するとまたこれがややこしい。

ここで特筆しておきたいのは、我々日本人や他のアジアの国で知られていて、しかも長い歴史を持つ鍼治療が西洋文化圏では全くもって知られた存在ではなかったということだ。我々が西洋文化についてほとんど知らないという時代があるが、その真逆が西洋人からすれば東洋文化について言えたのだ。そういう時代が歴史上長く続いたのだが、今を生きる我々はその感覚を無くしつつある時代に生きている、といえるであろう。なので、DNは鍼治療ではないと言っている人たちは、独自の研究、独自の理論に基づいていると主張しているが、こう言った文化的な相互理解がない歴史的な背景がある。アメリカで鍼治療が一般的に知られるようになるのは1972年のニクソン訪中以後のこと。アメリカ国内ではそれ以前にもアジア人の間のみで、鍼治療は知られていたが、それ以外の人種では全く知られた存在ではなかったのだ。

では、DNが一体どういうものか実際に説明しようと思うが、これを実際に行うには色々な用語の説明が必要となる。なぜなら、DNを始めた人たちは元々西洋医学のトレーニングを受けてきた人たちの集まりなので、ネーミングが我々、鍼灸をやるものからは全く馴染みのない単語が使われるからだ。実際は西洋医学の理論や用語に基づいた独自の造語も多いので、医者にもわかりづらい。例えば、IMS(インターマスキュラースティミュレーション: inter-muscular stimulation)という単語はIMSだけだとわからないし、インターマスキュラー、、、と言えればそれらしく聞こえるし、訳された単語は「筋内刺激」で意味はわかるが、堅苦しい感じがする。この単語はちなみに神経生理学(neurophysiology)から来ているそう。然るに、あくまでポイントだけに絞って説明する。

先に述べたが、色々な文献を発表したそれぞれの医師達が独自のシステムを提唱しているのでここではそれら全てには触れない。僕がざっと目を通した範囲で言えることは、使う鍼の種類やサイズ、また鍼を刺してから抜くまでの過程での扱いが違うという部分が大体だ。共通点は彼らが提唱するトリガーポイントに鍼を刺す、ということだろう。このトリガーポイントなるものが一般的に定着するのが大体1960年代。ジャネット医師の提唱以前からも西洋医学でも過敏点(1843年にRobert Froriepにより報告)は知られていたらしいが、このトリガーポイントそのものの発見は我々が鍼灸で用いる経穴の発見と同じ要領で行われて来た。つまりは、実際の触診であったり、押圧であったりだ。その研究の積み重ねと実践からによる。また、トリガーポイントと我々の知る経穴が同じ位置であるものが多い。

DNの問題点

DNはAcupunctureなのか？これが問題の根底であることは間違いないと思う。アメリカや、医道の日本3月号にあるオーストラリアのケースも我々鍼灸師が受けて通るような大したトレーニングもなく簡単に資格がとれ、しかも臨床で用いられ、その上アメリカではDNによって引き起こされる医療事故の多さ、と色々な問題が指摘できるが、その根源はすべて同じ問いに帰着する。DNは鍼治療なのか？

僕から言わせればこれは、歴史のすれ違いから引き起こされた事象、だということであり、「DN = Acupuncture」なのである。鍼灸の世界にも、皆さんがご存知の通り、色々なアプローチやシステムが存在する。百花繚乱、百家争鳴が現実だと思う。先の大戦後、中国で起きた文化大革命を経て、その後中医学が統一されいい意味でも悪い意味でも体系化され、それが周りの諸外国にも影響を与え、今日の鍼灸医療の教育や臨床の現実となっている。にもかかわらず、様々な流派が残り、また新たに生まれて来たりを繰り返すのが現状となっている。この歴史の視点から見ればDNは鍼治療の一派にすぎない。

さらには、鍼灸医療の歴史そのものを振り返ってみても、我々が未だに古典として学習する、西洋文化圏で言ういわゆるバイブルのようなものである、黄帝内経がいい例だ。この書物、書物と書いたが昔はそもそも今のような出版物として綴じられたものはなく、ようは巻物だ。この巻物がいつ書かれたか（厳密には諸説）？数千年以上も前に、まだ電気もガスも水道も無い時代に出来る限りの観察と研究研鑽によって書かれた。そしてそこから始まった理論体系が今現在の西洋科学文明の体系と違うから全てが全く違う、と言い切れるだろうか。例えば、後の書、傷寒論で「寒邪」や「風邪」が出てくるが、これは僕の解釈では「ウィルス性」の感染症である、と理解している。なので、麻黄湯、葛根湯や桂枝湯が出てくるが、僕はそれにウィルス性の症状に効果を示す生薬や普濟消毒飲のような方剤の考え方を加えて加味して用いる。すなわち、「風寒邪 = ウィルス感染」。ただ呼び名の違いにすぎない。

つまりここで僕が指摘したいのは、大昔に今と同じ機材や道具もないなかで、できる限りの観察をし、当時ある単語を駆使して事象を表現したにすぎない、ということである。であるから、DNは現在の単語や知識、そして観察や研究をもとに表現されただけにすぎず、その本質は鍼灸における鍼治療となんら変わりがない、ということである。

ちなみにDNを広めようとする人たちは、鍼灸師は経穴を使い、脈診や舌診などの特異な方法や気、血、五行などの独特の理論をもちいるのでDNは鍼治療ではないと言っている。

(※ちなみに、こういう自分自身はDNのような、そして多くの鍼灸師が用いているような局所に鍼を打つやり方は教わってはいるが用いない。僕の臨床は古来の遠隔鍼のみである。)

アメリカDN戦争

では実際にDNが今アメリカでどうなっているかを話そう。
大統領選挙たけなわのここアメリカで、全米の鍼灸業界が注目している代表的な州が現在二つある。いや、3つだ。

まずはカンザス州。少し触れたが、アメリカで鍼が知られるようになってからの歴史はまだ浅い。全米で最初の鍼灸免許制度が出来たのが、ここ西海岸のカリフォルニア州だ。それが1976年のことである。当時の州知事があのロナルド・レーガンである。なので、その時から数えて今年が40年目にあたる。そう、たったの40年だ。そのため、未だに鍼灸に関する法律や免許制度がない州がある。その一つとしてカンザス州があった。なので、例えば昨年2015年、ノースダコタ州では初めて鍼灸に関する法律が制定されたし、今年先月にやっとカンザス州でも法律が通った。この動きに反対するグループがアメリカでは存在する。それが「DNは鍼治療ではない」と言い、規制が無いのをいいことに、週末のみのセミナー受講のみでDNを今まで臨床に用いていた理学療法士(Physical Therapist)やカイロプラクター(Chiropractor)、またその他ではDO(オステオパシー)やND(ナチュロパシー)達である。全米の医師会の見解は、こういった安易な鍼治療に対しては反対である、と全米の鍼灸師を統括するNCCAOMに書簡を出している。僕の実体験ではDNがアメリカで広がったのはここ10年ちょっとぐらいだろうと思われる。カンザス州などではこの理学療法士達がロビーイングや電話、手紙、メール攻撃で州議会議員に攻勢をかけて自分たちの都合の良いようにしてきた。そして、現在もしている州が他にある。今回のカンザス州の法制化の公式文書をネット上に見つけたが、わざとDNも理学療法の一部であると書き換えられていた。法律は強いものの見方をするとというのが現実として見せつけられた気分には僕はなった。そもそも、理学療法士はカンザス州においては歴史があり、そして財力もある。鍼灸に関する法が存在しない州では数少ない、歴史もない鍼灸師が現状に果敢に立ち向かって、挑み、免許制度になるという勝利は勝ち得たものの、DNを排除することはできなかった。なので、これから法廷闘争に入るのではないかと予想されている。

次に、ノースカロライナ州。これは今現在法廷闘争が現在進行形である。これも財力がものをいうので油断を許さない状況だ。双方が相手に対して訴えている。鍼灸師VS理学療法士。DNを最も用いていて、広めようとしているのが理学療法士なので、こことぶつかることが我々鍼灸師にとっては主敵なのだ。ここを崩せば、カイロや他の医療関係者に対してもDNを封じる大きな第一歩となる。

最後はアトランタ州。ここは僕の友人の鍼灸師が鍼灸師会の代表を務める州で、理学療法士がDNを理学療法に関する法律に入れようとしているようなので、それを阻止するために弁護士やロビーイストと話を進めている最中である。あろうことかDNトレーニングツアーを中国の病院が中国で行うということに対して、親愛なるこの友人マークはその企画の中止を求めて中国の病院に働きかけたり、鍼灸の鍼を販売する業者に鍼灸師以外への鍼の販売をしないように働きかけている。

もちろん、鍼灸という医療がアメリカで持つ歴史が浅いがために、それが理由で鍼灸業界は大変苦しい目にあわされているわけだ。医道の日本の記事によくあるように、世界で鍼灸が認められ、広がっている、素晴らしい、、、などと言っている場合ではないのがここアメリカの実際の実情なのだ。なぜここまでもめるか、というとアメリカの保険制度にも問題がある。そもそもアメリカの医療費が高いので、保険料も高い。それでも、保険が降りると降りないとは雲泥の差が患者さん達には存在する。昨今、日本のテレビで言われているようにアメ

リカ社会の貧富の差の拡大、格差社会化はすさまじい。この保険だが、鍼灸よりは断然歴史のある理学療法士やカイロプラクター、その他にかかるとなんと大抵保険が降りるのである。鍼灸師による治療をカバーする保険は増えてきているし、それを僕も実感する。しかし、全てではないし、カバーする額も少ない。一般の患者さんにとっては鍼灸師が行う鍼治療もその他の人が行うDNも同じものだと思っているだろうし、違いがわからないと思う。保険制度も絡んでこのDNの問題は多くの鍼灸師にとっては収入に対する死活問題である。僕に言わせれば、実はそれどころではない。たった週末の講習に行っただけで行われるDNは鍼灸業界に対する侮蔑であり、患者さん達の安全問題、そして鍼治療というものに対する名誉や評判の問題なのだ。

(ちなみに僕自身は保険に頼らないで、実費で払ってもらうのをベースに考えて治療院を運営している。成果と評判が僕自身の、そして東洋医学の源泉であるという僕の信念による。)

日本での影響は

翻って我が祖国日本においてであるが、現状では鍼治療は鍼灸師による、となっている。それは東洋医学しか伝統的になかった日本(特に蘭学の登場以前)においては、ここアメリカよりも、世間一般にはよりはっきりとして違いが認識されているからだと思う。だが、もしも世界的な趨勢が変化し、DNがあちらこちらで理学療法士などによってなされるようになり、日本の理学療法士が「今これが世界の理学療法会において注目されるドライニードリングで、とても効果的な治療方法です。アメリカで最新の方法を日本にも取り入れました。」とか言う理由を付けて持ち込んでも限らない。なので、我が同僚である鍼灸師の先生方においては、一様記憶の片隅にこのDNというものの存在を止めておいていただきたい。日本人はとかく「アメリカ様」や「白人文化」に思考停止しかね無い病気が先の大戦以降あるから、注意が必要と僕は今回思った次第である。

僕の推測であるがオーストラリアの鍼灸師達はきっとこの戦いに敗北し、今に至ってしまったのであろう。マッサージ師までが鍼を打つようになったら本当の下克上かもしれ無い。僕は受けて立つ！かかってこい！といきりたってしまいそうだが、日本もそうなった方が鍼灸の受領率が上がる、ということに今のままではなりかねないのかもしれない。今回も最後に書かせてもらう。

「みなさん、一緒に頑張っていきましょう。」

(備考)

僕自身がDNの専門家ではないので、僕の今回の調査による寄稿分には間違いや不備があるかもしれないが、その場合には正しい情報にての訂正や修正情報をいただければありがたい限りである。ただ要点や論点には細心の注意を払って書いた。この問題について皆さんと有意義な議論が展開できればと思う。

(参照)

ノースカロライナのテレビ報道

<http://wlos.com/news/local/news-13-investigates-dry-needling-debate>

ノースカロライナ州で戦う鍼灸師協会への寄付

<https://www.gofundme.com/fightdryneedling?>

[utm_source=internal&utm_medium=email&utm_content=cta_button&utm_campaign=upd_n](https://www.gofundme.com/fightdryneedling?utm_source=internal&utm_medium=email&utm_content=cta_button&utm_campaign=upd_n)

カンザス州の理学療法士法の改定文

http://kslegislature.org/li/b2015_16/measures/documents/

[fa_2016_sb363_s_3613.pdf](http://kslegislature.org/li/b2015_16/measures/documents/fa_2016_sb363_s_3613.pdf)